

ケンブリッジ大学所蔵の琉球古写真コレクション
－ギルマールの見た琉球－

石垣忍・片桐千亜紀・中西裕見子

The Old Photograph Collection of Ryukyu in the Cambridge University Library
- Ryukyu seen through the eyes of an English traveler, Francis Henry Hill Guillemard

Shinobu ISHIGAKI, Chiaki KATAGIRI, Yumiko NAKANISHI

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 第9号別刷

2016年3月30日

Reprinted from the
Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.9
March, 2016

ケンブリッジ大学所蔵の琉球古写真コレクション －ギルマールの見た琉球－

石垣忍¹⁾・片桐千亜紀¹⁾・中西裕見子²⁾

The Old Photograph Collection of Ryukyu in the Cambridge University Library
- Ryukyu seen through the eyes of an English traveler, Francis Henry Hill Guillemard

Shinobu ISHIGAKI¹⁾, Chiaki KATAGIRI¹⁾, Yumiko NAKANISHI²⁾

Abstract

Francis Henry Hill Guillemard, an English traveler and writer, was on board the ship called Marchesa with her owner Charles Kettlewell and the others. The ship travelled East Asia and Southeast Asia from 1882 to 1883 and visited Ryukyu from 27th to 29th June, 1882, for three days. Guillemard took many dry plate photographs during his stay in Ryukyu, that are now held by the Cambridge University Library.

“The Cruise of the Marchesa to Kamschatka and New Guinea, with Notices of Formosa, Liu-Kiu, and Various Islands of the Malay Archipelago”, a travel book written by Guillemard with the details of the voyage was published in 1886. The book contains extensive description on Ryukyu with many illustrations, but no photographs of Ryukyu were run. While one of the photos of Ryukyu was recently published in the book by Noboru Koyama (2005), *“Kenburijji Daigaku hizo Meiji koshashin: Ma-ke-za Go no Nihon ryoko (Early Photographs of the Meiji Era at the University of Cambridge: the Journey of the Marchesa in Japan)”* (in Japanese), most of them have not been published before.

We have undertaken the archival research at the Cambridge University Library to comprehend all his photographs on Ryukyu. As a result of having investigated 26 photographs (including two mounted) and seven drawings comprising the collection, we found out that the collection was originated from 16 different photographs as some prints are from the same photographs. All were taken in Ryukyu, depicting Ryukyu style tomb (*Kame-kou-baka*), Shuri-jo Castle, Shikinaen Royal Garden, landscapes, Ryukyuan Women, Ryukyuan hairpins (*kanzashi*, both for men and women), Ryukyuan musical instrument (*sanshin*), Indonesian Kris, and some other objects. All seven drawings are originated from different photographs, but include a couple of views from Taiwan, whose catalogued title included the word “Formosa” which was the name of Taiwan and its surrounding islands during the 19th century. One of the Formosa drawings depicts a small island surrounded by a sheer cliff. Considering the voyage route of the Marchesa that she reached Kerama Islands one whole day and night after having left Tanshui in Taiwan, it is possible that the small island is part of the Senkaku Islands located on the way.

The collection holds significant historic resources recording the Ryukyuan people, landscapes and objects of the early Meiji Period, shortly after so-called Ryukyu Annexation. This article obtains permission to publish the pictures of the collection from the Cambridge University Library with their courtesy, with which we are most grateful.

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1 Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006 Japan

²⁾ 大阪府教育委員会文化財保護課 〒559-8555 大阪府大阪市住之江区南港北 1-14-16

Cultural Property Preservation Division, Osaka Prefectural Board of Education, 1-14-16 Nanko-kita, Suminoeku, Osaka 559-8555 Japan

1. はじめに

イギリスのケンブリッジ大学図書館にはフランシス・ヘンリー・ヒル・ギルマール (Francis Henry Hill Guillemand) が 1882 年に琉球を訪れ、撮影した古写真が所蔵されている。ギルマールはケンブリッジ大学のゴンヴィル・アンド・キーズカレッジ (写真 1～4) を出身とする英国人で、ケンブリッジ大学で最初に任命された地理学の教員 (助教授) であった (小山 2005)。彼はマーケーザ号 (Marchesa) という船に乗って、船主であるチャールズ・ケトルウェル (Charles Kettlewell) とその一行とともに、1882 年～1883 年にかけて東アジア、東南アジアを探検した。琉球へは 1882 年 6 月 27 日～29 日の 3 日間滞在したようだ。その時に乾板写真を撮影しており、現像 (焼付) された古写真がケンブリッジ大学図書館に所蔵されている。

ギルマール一行の航海と探検については、1886 年に発表された彼の著書 “*The Cruise of the*

Marchesa to Kamschatka and New Guinea, with Notices of Formosa, Liu-Kiu, and Various Islands of the Malay Archipelago (「マーケーザ号の航海、カムチャッカ、ニューギニア、台湾、琉球、マレー諸島の島々」) に一連の記録が残されている。この著作には琉球滞在時の詳細にわたる記述とともに、当時人気の挿絵画家であったヘンリー・チャールズ・セッピングス・ライト (Henry Charles Seppings Wright) の原画¹をもとにした挿絵が多く掲載されている。琉球に関するものは、計 12 点で、これらの挿絵は、ギルマールが残した写真の一部をイラスト化したものであった。琉球の写真については、小山騰氏 (2005) がその著書「ケンブリッジ大学秘蔵明治古写真-マーケーザ号の日本旅行-」によって 1 枚が公開されることとなったが、その多くは未だ公開されていない。

今回、ケンブリッジ大学図書館において、ギルマールの琉球古写真の全容を把握し、公開するための調査を実施した (写真 5・6)。



写真1 ケンブリッジの街並 (キングスカレッジ)



写真2 ケンブリッジの街並 (画面中央後方に見えるのが図書館)



写真3 ゴンヴィル&キーズカレッジ



写真4 ゴンヴィル&キーズカレッジ (名誉の門)



写真5 ケンブリッジ大学図書館

2. マーケーザ号の航海とギルマールの琉球訪問 マーケーザ号の航海

ギルマールとその一行は、イギリスの帆船マーケーザ号に乗って航海をし、極東アジアへやってきた。おそらく1882年6月27日に那覇港から上陸し、琉球の地を踏んだ。その日から6月29日までの3日間、琉球に滞在したと思われる。ギルマールの著作には琉球滞在の具体的な日付が触れられていないため前後関係からの推測であるが、一行の琉球滞在はととても短いものであった。

マーケーザ号は、1877年にスコットランドのクライド川沿いの港町、レンフルーで造られた。当時流行の先端であった鉄製のフレームに木を貼った複合製の船体を持ち、60馬力の蒸気機関による補助スクリューを備えた420トンのスクナー型の帆船であった。全長137.5フィート(約42m)、最大幅25フィート(約7m)の大きさであった。船主であるケトルウェルはこの船を、航海を決めたところに手に入れたようだ²。

1882年1月8日に、イングランドの南部、ワイト島のコーズを出港した。4月24日にセイロン島(現スリランカ)のコロンボに到着、その後、シンガポール、台湾、琉球諸島へ寄港した。その後も、マーケーザ号の航海は続く。琉球から日本へ向かい、1882年6～7月に日本列島を旅し、8～9月にカムチャッカ半島、ベーリング島を航海した。その後、10月に再び日本へ戻り、翌年1月までを過ごした後、1884年2～3月に中国と香港へ渡り、フィリピンから、スールー諸島などの太平洋の島々へ、そしてボルネオ島、ブルネイ、マラッカ、バタヴィア、ニューギニアなどを航海した。1884年のはじめ頃に、イングランドへ向けた航海を始め、



写真6 調査風景

シンガポール、ペナン島、セイロン島のコロンボを経て、1884年4月14日にサウサンプトンに帰港した。

ここでは、ギルマールの著作(1886)をもとに³、彼らの琉球での足取りを追ってみたい。

那覇港へ入港(1日目・6月27日)

ギルマール一行は、1882年6月26日に台湾島の淡水を出港、琉球諸島をめざし東へ向かった。その翌朝、慶良間諸島を通り、午後2時に「大琉球の島」と呼ぶ沖縄島の那覇港に錨を下ろした。翌朝というからには、6月27日であろう。港はリーフが発達していて珊瑚がとても美しい反面、船の動きが制約される。にもかかわらず、港はにぎわい、その日も荷下ろしをしているジャンクが6隻ほどいた。街の美しさや、生い茂る木々の隙間からところどころ見える赤瓦の屋根をみて、「日本であって日本ではない独特の特徴」がある景観だと感じている。

中でも、港の北側にあったという石灰岩の崖面に、墓が密集していた様子が目についたようで、「断崖絶壁の周辺や中腹のどの方角を見ても墓が密集している」、「那覇港の周辺で最も印象深かったのが、至る所にあった大量の墓である」と、繰り返し記述されており、琉球の墓の様子がよほど印象深かったに違いない。

彼らは、那覇港に上陸すると、ものすごい群衆に囲まれた。異国船の寄港は、当時まだめづらしかったようだ。

琉球上陸から晚餐

上陸した一行は、日本の役人らしき人物に出迎えられた。役人に連れられて街を歩いて抜け、まず交番に立ち寄り、その後、日本風の本造家屋に通された。

部屋は素晴らしい襖絵が描かれ、床は赤と緑のカーペットで覆われ、椅子と机も用意された立派な建物だった。ここでしばらく出された日本茶をすすり、タバコを吸いつつ今後の処遇を待っていたところ、ひとりのアメリカ人が登場した。彼から、これまでにこの島で住んだ欧米人は自分を含め3人だけで、どの場合も非常に厳格な監視の目があって自由に街へ外出することも許されたことがない、という状況をつたえられた。そして、日本人の医者であるウエノ (Uyeno) 氏が登場する。彼は、その後も一行の滞在中に案内役兼通訳を勤めることになる人物である。ギルマール一行は彼を通して役人と少し話をし、特に首里に行きたいという願いを伝えて長岡護美⁴からの紹介状を渡した。

しかし、なぜか那覇港からさらに北にある運天港に行くように勧められた。これに対して、その意思はないことを伝え、首里に行きたいがために那覇を訪れたのだということを強調した。このように、首里城を見たいという交渉は難航したようだが、副県令が到着したことによって事態は後に好転することになる。しかし、この時は、通り一遍の挨拶をした後、首里に行きたいという望みを彼にも再び訴えたが、外国人が訪れることは法律で禁じられていると告げられた（結果としては翌日、例外的に訪問が許されることになった。）。

その日の日没ごろ、那覇港に戻る一行は、「港の入り口にある木で覆われた小島」を通り過ぎ、6人ほどの地元の人が歌って踊っているのを興味深く見ながら船まで帰った。この小島とは当時島であった奥武山のことであろうか。その夜、ギルマール一行は滞在中に留守だった沖縄県令⁵に代わり、歓待してくれた副県令を、友人になった他の2名（通訳のウエノ氏を含む）とともに船での晚餐に招待した。身振り手振りを交つつ、最後は地図と写真を見ながらいろいろ話しがはずんだようだ。

首里への道のり（2日目・6月28日）

この晚餐の翌日である6月28日、一行の願いは聞き入れられ、首里を訪れることができるようになった。昨日の晚餐外交が効を奏したのかもしれない。まずは、ウエノ氏と役人につれられて副県令の家に行く。そこから、「色鮮やかに塗られすばらしく美しいが、1メートル⁶にも満たないほどの小さな輿」にのせられて

目的地である首里へ向かう。輿はヨーロッパ人の体はとてと収まりきらないほど小さく狭かった。手や足など体の一部がはみ出し、縮こまって乗っているのはたいへんな苦痛だったろう。街を出てしばらくしたところで、港に注ぎ込む川をひとつ越えた。ここでギルマールは、琉球の橋の構造や細かい欄干の彫刻、那覇から首里までの石畳の道路などには、大変な労働力が注がれていたであろうと、賛辞を述べている。このとき渡った橋は、「板石に穴をあけ、穴と穴の間には動物や魚、貝や花などの細かい彫刻が施された欄干」を持つものだった。これは石欄のことで、石柱と石欄を持ったことで知られる崇元寺橋を渡ったのだと推測される。また、ギルマール一行は輿を下りて歩く機会もあったのだろう。よく滑る珊瑚性石灰岩敷きの道をブーツで歩くのはとても辛く、「地元の人たちのように裸足で歩いたほうがよほど楽だろう」とこぼしている。

那覇を出て1時間ほどで、巨大な松の木についた。その下に、「琉球王の御殿のうちの1つにあたる建物」の入り口だと教えられた門があり、道路の脇には、苔の生した門柱が立っていた。そこには、「優れた者も、劣った者もここでは皆同じように下りてとどまらなければいけない。」と文字が刻まれていた。これは、まさしく崇元寺の門前に設置されている下馬碑のことを指している（図1）。その後、ウエノ氏の案内で中へ入る。崇元寺下馬碑を見たのなら、中とは崇元寺のことであろう。日本の様式で建てられ特に面白い特徴はなかったが、「大きな宴会場の周りには、深くて豊かな色をした赤漆で塗られた琉球国王代々の名前が金で書かれた小さな板」、がたくさんつり下げられているのを見た。崇元寺正廟の中に入り、多くの位牌をみたものと推測される。

首里城へ

その後、首里へと向かう道を登る。首里に近づくにつれて、大きな石の壁で視界が遮られるようになった。そこでたどり着いた門については、「日本風というより中国風のつくりだが、日本の神社の鳥居にも似た構造をしている」と述べている。守礼門に辿り着いたのであろう。この時ギルマールが撮影した守礼門の写真が残されている。

守礼門を抜け、いよいよ著作の中でギルマールが「要塞」と呼ぶ首里城へ向かう。急な坂の脇には木々が生い茂り、その隙間から石垣が覗く。石垣の石が風化

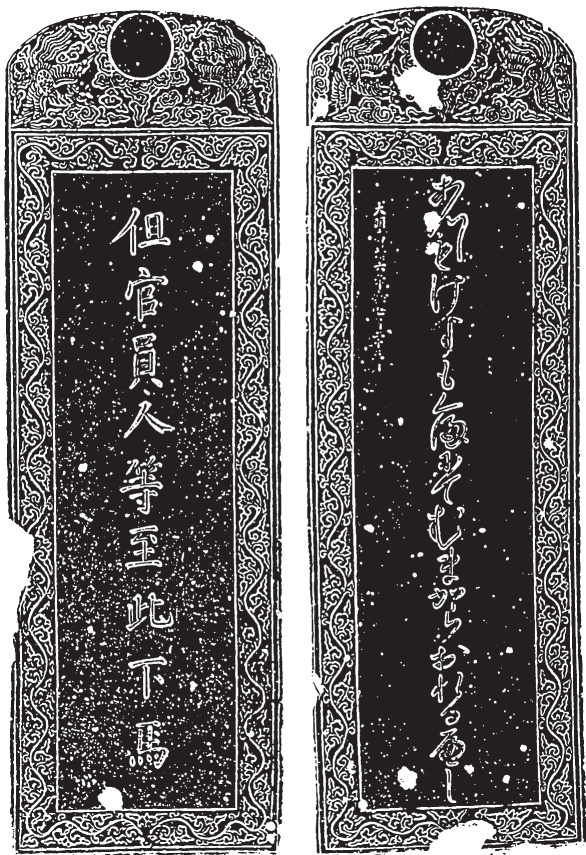


図1 崇元寺下馬碑拓本（沖縄県立博物館・美術館蔵）

して、灰色になっている様子を、彼は「グロテスクな変形」と表現している。池の方へも行き、そこでは石橋の彫刻の美しさや、池の蓮、中央にある小さな寺のような祠のような建物などを見た。弁財天堂と円鏡池にも立ち寄ったのであろう。この「要塞」の中がこれほど広いとは思っていなかったようだ。

その後、「日本のものより小さいサイズの2匹の石のライオンに守られている要塞の門」から、石垣の中へ入る。このルートで登り、両脇にシーサーのある門といえば歓会門のことと考えられ、これをくぐって中へ入ったのであろう。大まかにみれば3重で不規則な形状の石垣がある。門をひとつずつくぐって中へ入り、半分廃墟のようになった倉庫や建物を過ぎる。日本の石垣と比べ、琉球の石垣は曲線が目立つ形状であることが描写されている。グスクの石垣が興味深く映ったようだ。

石垣をはいり、2つめの門の近くで、岩の割れ目か

ら勢いよく水が湧き出ていた。そこに、「この水はとてもよい」などと島を訪れた中国人の使節の素朴な言葉が、漢字で石にいくつか刻まれていた。龍樋と冊封七碑のことであろう。

ギルマール一行は、おそらく、瑞泉門、漏刻門、広福門を通り、奉神門から御庭へ入った。中には、兵舎のような建物があって、200人ほどの兵隊が駐屯していた。建物の中央には中庭があり、そこで兵が訓練している様子も見かけたが、ウエノ氏は、城が日本人の軍隊に占領されていることについて、無関心で居てほしいようなそぶりを見せた。ギルマールが琉球を訪れた1882年には、首里城は熊本鎮台沖縄分遣隊の営所であったことから、彼が見たのはこの分遣隊の訓練風景であろう。ここでギルマールは、彼の知る限りでは、バジル・ホールもその他の船長も首里を訪れることは叶わず、ペリー提督でさえもここまで内側には入って来れず、ここに足を踏み入れたヨーロッパ人はそれまでいなかったことに、改めて感慨にふけっている。

そして、ついに「2匹の石でできた巨大な龍」（まさしく龍柱である）に守られた入り口を通して、聖域である正殿に足を踏み入れた。部屋から部屋へと見て周り、廊下、宴会場、後宮、召使いの部屋など、完全に迷宮のような建物を見て回ったが、残念ながら、言葉では言い尽くせないほど荒廃していた。

昼食の後、島の大部分を見渡すことができる見張り台で（東のアザナか西のアザナか）、ウエノ氏が2-3マイル南東に離れた丘をさして、もうひとつ宮殿があることを紹介する。一行はそこにも行きたいと言い、また輿にのって移動した。識名園である。途中で、かんざしなど、工芸品をいくつか安く買った。彼の写真にはかんざしなどが撮影されており、この時購入したものかもしれない。識名園では、お茶を飲んで休憩した。識名園の池や庭、小さな建物の美しさについては多くが述べられており、やはり彼の写真が残されている。そこでその日の冒険は終わったようだ。

那覇を離れる（3日目・6月29日）

首里訪問の翌朝の6月29日、一行は出発の準備を始めた。ウエノ氏から琉球の珍しいもの、蛇の皮の三線、かんざし、漆塗りの皿などをいろいろとお土産にもらった。この辺りの島々ではとても珍しく、その美しさから非常に価値があるといわれ、大きな美しい

虹色をした貝(*Avicula macropteron*⁷⁾)も受け取った。そして副県令に出発の挨拶をし、港へ戻った。その日の午後遅くに錨を上げ、島の南端をまわって琉球を後にした。

島の人々の形質的特徴

ギルマール一行は、この短い滞在で、行動範囲も限られていたとはいえ、どこへ行っても一行は群衆に囲まれた。一行を囲んだ群衆には、子どもはたくさん居たが、女性は1人も見当たらなかったことが、彼の印象に残っている。しかし、市場で働く人々や売り子たちをはじめ、女性とも何らかの接触はあったようで、ポートレートのような写真も残されている。それらの出会いをもとに、ギルマールは琉球の人々の形質的特徴や物質文化、習俗の特徴を詳細に記録している。日本人と比較した記述が多く、「(形質的に)日本人に似た特徴もあると言えるが、やはり、明らかに違う特徴がある。琉球では、日本から来た人々と土着の人々は、我々でも瞬時に簡単に識別することができるほど違う特徴がある。」と観察している。ギルマールは、その後訪れて観察した日本人とは異なった特徴を当時の琉球人に見て取ったようだ。そして、琉球人に好意的な印象を受けた記述が多い。それらについても紹介したい。

例えば、琉球の人々の体格については、「背が低い人種であり、おそらく日本人以上に背が低い。しかし、スタイルはもっとよい。日本人のように胴長短足ではなく、胸部がよく発達している。」と記述している。日本人よりも体格がよい印象があったようだ。

以下に、琉球人について詳細に述べられた記述を引用しておく。

「背が低い人種であり、おそらく日本人以上に背が低い。しかし、スタイルはもっとよい。日本人のように胴長短足ではなく、胸部がよく発達している。肌の色は様々であるが、田畑で働く人々は腰布を巻き、マレー人並みに肌の色が黒い。上流階級は色白ではあるが、中国人のように黄色くはない。日本人に似ている特徴もあると言えるが、やはり、明らかに違う特徴がある。琉球では、日本から来た人々と土着の人々は、我々でも瞬時に簡単に識別することができるほど、違う特徴がある。琉球人は、日本人ほど平べったい顔をしておらず、日本人より目とほりが深く、鼻も高い。額も立体的で高いが、ほお骨は日本人ほど高くない。眉

毛は濃くアーチ形で、睫毛が長い。表情は優しく愛想がよく、やや物憂げで、ここの人々の本当の性質を表しているに違いない。あご髭はのばせばとても長くなるようだ。髪の色は黒いが、ヨーロッパ人と比べると濃いとは言えない。老人はしばしば、雪のように白い髭をかなり長くのばしている。頬の毛(揉み上げ)は少なく、たいてい剃られていて、口髭も薄い。時々あご髭を編んで先を粘着性のある液体で尖らせている奇妙な身なりの人もある。」「輿の舁き手は、輿のサイズに合うほど小柄な人だったが、がっしりとした体つきをしていた。」。

島の人々の風俗

前項の終わりで引用した髭の観察からもわかるように、ギルマールは、髪型や服装などのファッション、入れ墨の習俗など、琉球の風俗についても詳しく観察している。上陸時にも、「長いロープのような服を来た土着の人々が散歩」をしている様子を見たり、輿の担ぎ手についても「彼らは服を着ていたが、日本でいうところの半裸というか、ほとんどの人は腰巻きをしているだけだった。数人は、「羽織」のような、琉球では何と呼ばれているのか知らないが、青くて、粗い木綿でできた短い上着を着ていた」と観察している。

服装については、以下のように述べている。

「島の人々の服装はどの階級も日本人のものとはほぼ変わらなかった。ほとんどの人々が、「着物」という、長袖でゆったりとし、足元まで長く、首もとはV字に開いた「ロープ」のようなものを着ていた。着物は前で重ねて留められ、腕の下が開いた状態で、腰にベルトが巻かれている。ベルトにはパイプ入れやタバコケースが留められている。それらの容器は、骨や象牙など、財力により違う素材で凝った細工が施された「根付け」という大きなボタンのようなもので、ベルトに取り付けられている。琉球人も、日本人同様にタバコとパイプなしでは出かけない。以前読んだ書物には、人々は「はちまち(hachi-machi)」と呼ばれる、絹でできた、てっぺんが平らで頭の周りを八の字形に巻いたような特徴的な帽子をかぶっていると書かれていた。身分によって色が違うとも書かれていたが、かぶっている人はほとんどいなかった。大半の人は、頭にはなにもかぶっておらず、やや階級の高そうな人は、日差しを避けるために紙の傘を持っていた。労働者や、下層階級の人々は裸足だった。上流階級の人々は、サンダルのような

日本人の靴（草履のこと）と靴下をはいていた。靴下は、親指とその他の指の2つに別れている（足袋のこと）。女性も男性と同じような服装だが、ベルトはせず、着物は、どのようにかは見えないが脇で留められていた。』。

風俗については、服装の観察でも見られるように、男女差についても考察している点が優れている。例えば入れ墨について、「入れ墨の習慣があるたいていの国で、男性の入れ墨の方が女性のそれより装飾的だが、琉球の場合は女性の方が装飾的だ。色は青でおそらく藍の染料が使われている。」と述べている。

また、男女差もなく、会う人すべてが同じ髪型をしていたことが印象的だったようで、写真を多く残したかんざしについても触れながら、髪型について詳細な観察が述べられている。

「髪型も非常に特徴的で、男性も女性も、金持ちも貧しい人も、まれに最下層の田畑で働く労働者たちなどの例外を除いて、国中で皆同じ髪型をしている。頭のとっぺんの小さな面積が剃られ、残りの髪をととても長くのばしている。長い髪をひとつにまとめ、ねじったり編んだりして、剃ってハゲにした部分に結び目をつくるが、ハゲの部分は全部隠れてはいない。明らかに日本の習慣を真似たと思われる装飾品、2つのヘアピン（かんざし）で、その髪の結び目がとめられていて、それは、カマサシ(Kamasashi) とウシサシ(Usisashi) と呼ばれる。」

ギルマールが見た琉球

琉球での滞在は短かったものの、ギルマールは、琉球に来ることを心から楽しみにしていたことが、著作の中でも触れられている。バジル・ホール船長が1816年に琉球を見てからおおよそ4分の3世紀が経過し、この国独特の魅力がどれほど変わってしまったか、失われてしまったかを確かめたい気持ちがあった。

そして著作でも、当時すでに欧米諸国でもある程度様子が知られるようになっていた日本については多くを記載せず、あまり知られていない土地や島々の記録を記載することに焦点があてられており、琉球についても、滞在日数の短さにも関わらず、その3日ほどの滞在の記述にさかれているページは第2章と第3章と多い。

そしてケンブリッジの学者らしく、特に琉球については、専門であった地理学的な観点にとどまらず、形

質人類学的、文化人類学的な観点を踏まえた幅広い視野から、仔細に観察を行っていることがわかる。男女の性別や、日本をはじめとする他国との比較の観点からの記述も多い。行動の制約も多く、首里城への立ち入りが許されたとはいえ、滞在中は終始ウエノ氏や他の役人に伴われ、琉球が許したもの、見せたかったものが基本である限られた様子しか見ることはできなかったであろう。その中でも、常に目に入るものを意欲的に記憶と記録に留めながら琉球を歩いた、そんな旅だったのではなかろうか。

3. 調査方法と結果

ギルマールの琉球古写真の調査はケンブリッジ大学図書館内で実施した。写真は「EAST INDIES X Dr. Guillemard」と題された緑色のケースに納められており（写真7・8）、ケースの中にはインデックスが入っている。インデックスには「Jawa」、「Singapore」など地域の名前が記されており、1～62までの番号が振られた写真の題名が明記されている（写真9）。このインデックスには琉球に関する記述はなく、琉球の古写真は別の封筒にまとめて納められていた（写真10）。写真は現像され、厚紙に貼られているものや（写真11）、貼られていないものがある。写真の表か裏には写真の題名やメモが書かれている（写真12）。

調査では、1点1点の写真とそのメモを確認し、すべての内容をメモして一覧表を作成した（表1）。記録の為に現像された写真そのものの写真をデジタルカメラで撮影した。今回公開する写真はこの時撮影したものである。

調査の結果、封筒の中は33枚の写真とイラストを確認した。その内、写真は26枚、イラストは7枚である。26枚の写真の内、2枚は1つの台紙に張られている（表1 No.12）。ただし、同じカットの写真を複数現像しているものもあり、それらをまとめると16種類の写真が存在することになる。写真はすべて琉球での撮影と考えられ、亀甲墓、首里城、識名園、街の風景、琉球の女性、琉球製の簪（男性用・女性用）や三線、インドネシアの蛇行剣といった道具類からなる。イラストは7枚ともすべて異なるものを描いてあり、琉球だけでなく台湾を描いたものもあるようだ。なぜならば、表1 No.26～29までは題名に“Formosa”の文字が見られることから、台湾及びその近海を描い

たものと考えられる。ただし、表1 No.28は絶壁の小島を描いており、マーケーザ号が台湾の淡水を出港して一昼夜で慶良間諸島に到達したことを考えると、

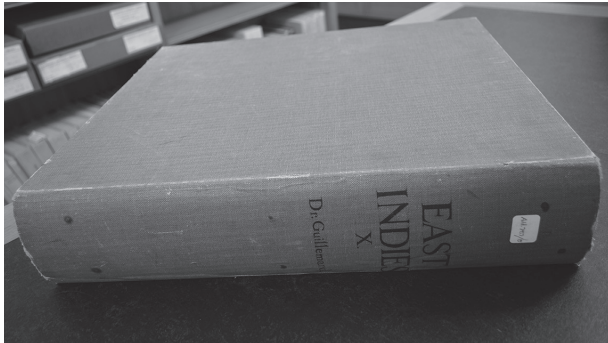


写真7 琉球古写真が収納されたケース
「EAST INDIES X Dr. Guillemand」

その航路上にある尖閣諸島を描いている可能性も考えられる。

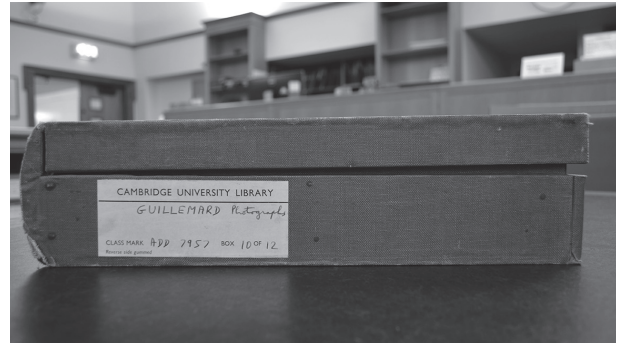


写真8 ケース側面

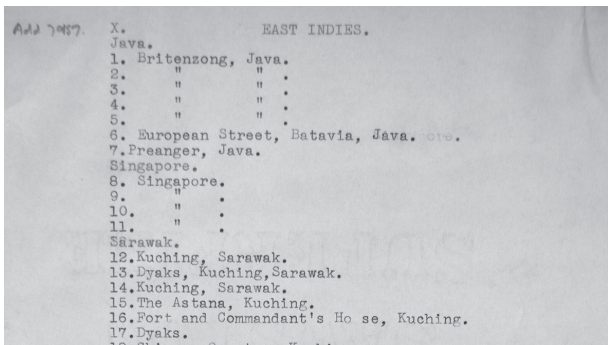


写真9 収納ケース内のインデックス

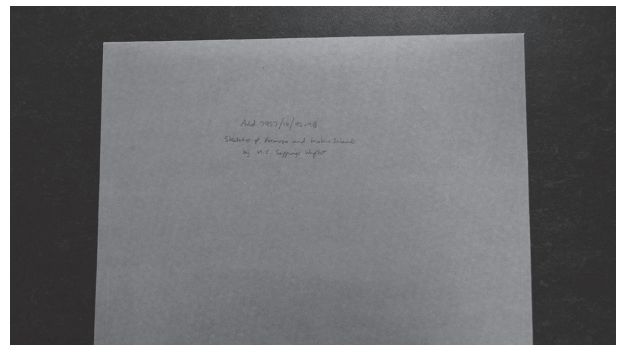


写真10 琉球古写真が収納された封筒

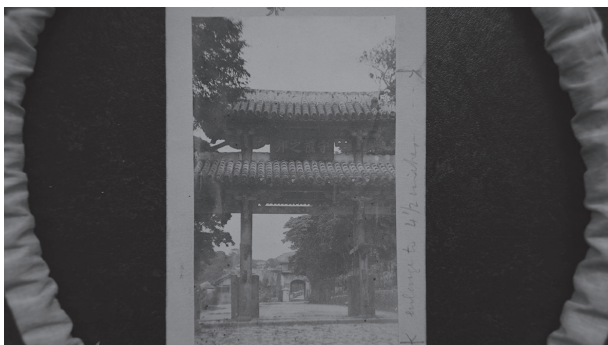


写真11 プリントされた写真の状況(表)

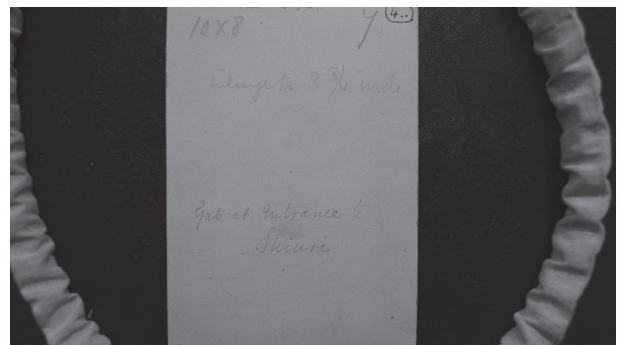


写真12 プリントされた写真の状況(裏)

4. ケンブリッジ大学図書館の琉球古写真コレクション

表1はケンブリッジ大学が所蔵するギルマールの琉球古写真コレクションの一覧である。「No.」は筆者らが付けた任意の番号。「番号」・「カタログの名称」は写真に記載されていたケンブリッジ側の管理番号と資

料名称。「サイズ」はプリントされた写真のサイズで厚紙に張られている場合でもそれは含まない。「観察」は筆者らが観察した事で写真の状態や写真の表裏に記載されていたメモをまとめたもの。「写真内容の所見」は撮影された写真の内容を筆者らが解釈したものである。

表1 ケンブリッジ大学所蔵のギルマール琉球古写真コレクション

No.	番号	カタログの名称	サイズ	観察	写真内容の所見
1	Add. 7957/10/75a	Tomb of a Liukiuan. "Tomb of a Liukiuan, near T'skina, Okinawa-sima, Liukiu Islands,"	18.4×14.2cm	白黒プリント、台紙無し、写真の上部に破った痕跡、裏にメモ(3. Tomb of a Liukiuan, near T'skina, Okinawa-shima Liukiu Islands)。circa 1883。	亀甲墓の近景。ギルマールは那覇港の北側に並ぶ墓群に強い興味を示していたため、ここで撮影したものか、那覇港から首里城を経て識名園に行く途中、または帰る途中に存在した墓を写したものと考えられる。このカットがイラスト化されてギルマールの本に掲載されている。
2	Add. 7957/10/75b (写真13)	[Tomb of a Liukiuan, Okinawa]. The photograph is labelled 'Lewchew tomb'.	19.2×14cm	白黒プリント、台紙有り、台紙の枠上に縮小指示のメモ(reduce to 37/8 wide)、枠下にタイトル(Lewchew Tomb 456)、台紙裏 左下隅にメモ(3、1/4、1、1/2、1/8)。circa 1883。	"
3	Add. 7957/10/75c	[Tomb of a Liukiuan, Okinawa].	22.2×18.9cm	大きい白黒プリント、台紙無し、裏にメモなし、写真上下と右サイドに破れた痕跡、色はやや薄め、トリミングなし。circa 1883。	"
4	Add. 7957/10/75d	[Tomb of a Liukiuan, Okinawa].	22.1×19cm	大きい白黒プリント、台紙無し、裏にメモなし、写真上部と右サイドに破れた痕跡、色はやや薄め、トリミングなし。circa 1883。	"
5	Add. 7957/10/75e	[Tomb of a Liukiuan, Okinawa].	22.2×19.2cm	大きい白黒プリント、台紙無し、裏にメモなし、写真上下と左サイドに破れた痕跡。circa 1883。	"
6	Add. 7957/10/75f	[Tomb of a Liukiuan, Okinawa].	22.2×19cm	大きい白黒プリント、台紙無し、裏にメモなし、写真上下と右サイドに破れた痕跡、75aに黒い縁がついてトリミングされてない状態、75eと同じだが、色はややこちらの方がやや薄い。circa 1883。	"
7	Add. 7957/10/76 (写真14)	Lotus pond at T'skina.	22.2×17.1cm	白黒プリント、台紙なし、裏にメモ(6., Lotus pond at T'skina to the page ...made.), 退色著しい。circa 1883。	識名園の遠景。このカット似たものがイラスト化されてギルマールの本に紹介されている。
8	Add. 7957/10/77 (写真15)	Gate at Entrance to Shiuri.	6.3×10.6cm	小さい白黒プリント、台紙有り、裏にメモ有り(10×8, y, 4..., enlargeto 3 3/4 wide, Gate at entrance to Shiuri)、表の台紙にもメモ(拡大の指示, enlarge tp 4 1/2 wider...)。circa 1883。	首里城、守礼の門正面、その奥には観音門が見える。観音門の近くには熊本鎮台沖縄分遣隊の営所が見える。このカットがイラスト化されてギルマールの本に掲載されている。

No.	番号	カタログの名称	サイズ	観察	写真内容の所見
9	Add. 7957/10/78 (写真16)	Entrance to Shiuri.	6.5×10.5cm	小さい白黒プリント、台紙有り、裏メモ (5, 10×8)。circa 1883。	首里城、観会門、観会門の近くには熊本鎮台沖縄分遣隊の営所が見える。
10	Add. 7957/10/79 (写真17)	Inner fortification of the Citadel Shiuri, Liukiu Islands.	16.2×12.2cm	白黒プリント、台紙無し、退色が著しい、裏にメモ (2956, to the page: Palaces? Are small may be made is heack distance lu?.., To have preliminary cheming? Made for this, for distant view, see the photo, of lotus pond, 4. Inner fortification of the Citadel Shiuri, Liukiu Island.)。circa 1883。	首里城、右掖門を望む、城の下、道、手前左に建物。このカットがイラスト化されてギルマールの本に紹介されている。
11	Add. 7957/10/80 (写真18)	[Liukiu Islands]. A view looking down on a settlement.	21.2×15cm	大きめサイズの白黒プリント、台紙なし、退色激しい、しみ斑点有り、裏にメモ無し。circa 1883。	首里城、おそらく内郭日陰台付近から下を眺めた遠景写真。手前左に建物と久慶門が見える。右には首里の集落の屋根が見える。
12	Add. 7957/10/81	[Liukiu Islands]. 上 A view looking down on a settlement. 下 The Lotus pond at T'skina.	上 18.5×13.5cm 下 19.7×14.8cm	台紙に写真2枚、どちらも退色激しい、メモ 上は455, 下は458, うらにメモあり(識別できず)。circa 1883。	上はAdd.7957/10/80と、下はAdd.7957/10/76と同一カット。
13	Add. 7957/10/82 (写真19)	[Liukiuan Girl, Napah-Kiang]	6.7×10.6cm	小さな白黒プリント、柄付きの枠の台紙有り、裏にメモ (1.., View to part to be done only, <かんざしの絵> pin ... of head to top of fan 2 5/8)。circa 1883。	いすに座った、琉球衣装・髪型の女性、手に扇を持つ、隣にAdd.7957/10/84と同じ植物が載ったテーブルが写る。このカットの顔部分がイラスト化されてギルマールの本に紹介されている。
14	Add. 7957/10/83 (写真20)	Liukiuan Girl.	5.8×8.2cm	小さい白黒プリント、台紙有り、釣り鐘形の写真に白い縁、裏にメモ (1, 1.., 8 1/2×6 1/2, not to be done. Is only to elucidate? The other.)。circa 1883。	いすに座った琉球衣装・髪型の女性。手には何も持たない。
15	Add. 7957/10/84 (写真21)	Liukiuan Girl.	5.7×8.8cm	小さい白黒プリント、台紙有り、裏メモ (3, 8 1/2×6 1/2, Hand to the enlarged to other ...)。circa 1883。	琉球衣装・髪型の女性の写真、手に布？を持ってる。横に小さなテーブルに植物がのる。
16	Add. 7957/10/85 (写真22)	Liukiu Hairpin.	5.6×8.8cm	小さい白黒プリント、台紙なし、裏メモ無し、写真上部に破った痕跡。circa 1883。	金属製の水洗花形の髪差(カミサン)を手で持っている。このカットがイラスト化されてギルマールの本に紹介されている。

No.	番号	カタログの名称	サイズ	観察	写真内容の所見
17	Add. 7957/10/86 (写真23)	Liukiu Hairpin.	7.2×9.4cm	小さい白黒プリント、台紙なし、裏メモ無し、写真両サイドと上部に破った痕跡。circa 1883。	龍甲簪(ウシザシ)を手で持つてゐる。このカットがイラスト化されてギルマールの本に紹介されている。
18	Add. 7957/10/87a	Musical instrument, Loochoo Islans. A photograph of a samisen (a three-stringed, Japanese musical instrument) from the Liukiu Island.	9×14.8cm	白黒プリント(台紙なし)、裏にメモ(Musical instrument Loochoo Islands)。circa 1883。	真壁型と思われる三線。イラスト化されてギルマールの本に紹介されている。
19	Add. 7957/10/87b (写真24)	Musical instrument, Loochoo Islans. A photograph of a samisen (a three-stringed, Japanese musical instrument) from the Liukiu Island.	9.6×14.2cm	白黒プリント(台紙なし)、裏にメモ無し、87aと同じ写真(重ねたらびつたり一致)で、全体的に色がやや明るい。circa 1883。	//
20	Add. 7957/10/88 (写真25)	[Dagger]. Probably from the Liukiu Islands.	7×11cm	小さな白黒プリント、台紙無し、裏にメモなし、写真両サイドと上部に破った痕跡。circa 1883。	蛇行剣。インドネシアでクリスと呼ばれる短剣と思われる。首里城では円覚寺跡(山本2002)で出土している。同一のものが不明だが、明治時代にこの剣が存在していたことを示す貴重な写真である。
21	Add. 7957/10/89 (写真26)	[Stick-shaped Implement]. Probably from the Liukiu Islands.	5.6×5.6cm	小さい白黒プリント、台紙無し、写真上部と右下角に破った痕跡。circa 1883。	金属製の簪(ウシザシ)を手を持った写真。
22	Add. 7957/10/90 (写真27)	[Street and Houses] Probably in the Liukiu Islands.	8.7×5.8cm	小さな白黒プリント、台紙有り、裏にメモ(10×8, 6)。circa 1883。	集落の道沿いの風景、左手に石垣と建物、中央に道。このカットと似たものがイラストとしてギルマールの本に掲載されている。
23	Add. 7957/10/91a	[Crowd Scene]. Probably in the Liukiu Islands.	22.3×19.2cm	大きい白黒プリント、台紙無し、写真右サイドと下部に破れた痕跡、左サイド上部に破れ、裏にメモなし。circa 1883。	役人とギルマール一行の記念写真か。龍の後ろに多くの民衆、龍の前に正装した日本人数人(役人か)と、西洋人二人(ギルマール一行か)、龍の中にも一人、後ろに冊とその後ろに瓦屋根の建物。この写真が小山(2005)で公表されている。知事公邸前か。
24	Add. 7957/10/91b (写真28)	[Crowd Scene]. Probably in the Liukiu Islands.	21.1×18.9cm	大きい白黒プリント、台紙無し、写真左サイドと下部に破れた痕跡、左上角破れ、画鋏?ホチキス?の穴が角4つに開いてる。裏にメモなし、同じカットの写真の中では保存状態が最も良い。circa 1883。	//

No.	番号	カタログの名称	サイズ	観察	写真内容の所見
25	Add. 7957/10/91c	[Crowd Scene]. Probably in the Liukiu Islands.	22.2×18.4cm	大きい白黒プリント、台紙無し、写真右サイドと下部に破れた痕跡、右下角破れ、裏にメモなし、91aと比べて、さらに退色が著しい。circa 1883。	〃
26	Add. 7957/10/92 (写真29)	Our skipper, Formosa. A sketch by H.C. Seppings Wright.	14.7×17.2cm	硬い紙に絵の具、裏にメモ Seat to look wordan?. Pigtail woved? S...d head, dig same s..?) Our skipper Formosa, 1.. circa 1883。	スケッチ。台湾。台湾での船長か。キセルでたばこを吸う男性(台湾人か)。サイン入。
27	Add. 7957/10/93 (写真30)	Going down Keeling River, Formosa. A sketch by H.C. Seppings Wright.	26.5×14.4cm	硬い紙に絵の具、裏にメモ More movement in figure, 3. dig same sight?, Going down Keeleung River, Formosa. circa 1883。	スケッチ。台湾。小舟をこぐ男性。右下にサイン入。港であった基隆の川か。
28	Add. 7957/10/94 (写真31)	Steep Island, Formosa. A sketch by H.C. Seppings Wright.	26.5×14.4cm	スケッチブックに絵の具、台紙貼り、台紙下にメモ、to be 4 inches wide, 裏にメモ Steep Island Formosa, 4. as Island (消されてる) 他、数字のメモ。circa 1883。	スケッチ。海に浮かぶ船の遠景、背景に島、尖閣諸島の南小島か。右下にサイン。
29	Add. 7957/10/95 (写真32)	East Coast, Formosa (precipices 6000-7000 ft.) An unmounted sketch by H.C. Seppings Wright.	17.5×14.9cm	スケッチブックの紙にペンでスケッチ、色なし、裏にメモ 5. East Coast - Formosa (precipices 6000 - 7000 ft.)。circa 1883。	スケッチ。台湾。海から見た山のスケッチ、東海岸か。右下にサイン。
30	Add. 7957/10/96 (写真33)	[Lotus Lake at T'skina]. A sketch by H.C. Seppings Wright.	22.4×15.2cm	サインの下にメモ (omit this figure), 裏にメモ (Lotus Lake, <鉛筆書きの池と花?の絵>, plant from of temph? To be abolished, Temple to be over the century? arch?)。circa 1883。	スケッチ。琉球、識名園。絵の具、右下にサイン。このイラストがギルマールの本に紹介されている。
31	Add. 7957/10/97 (写真34)	Tattooed hand, woman, Loochoo Islands. An unmounted sketch by H.C. Seppings Wright	14.9×20.5cm	スケッチブックの紙にスケッチ、輪郭はペン?に水彩絵の具で色づけ? 裏にメモ (Tattooed hand, woman. Loochoo Islands.)。circa 1883。	スケッチ。琉球、入れ墨がはいった左手の甲。イニシャルのサイン。このイラストがギルマールの本に紹介されている。
32	Add. 7957/10/98 (写真35)	Cocoa nut jar An unmounted sketch by H.C. Seppings Wright.	11×16cm	スケッチブックの紙にスケッチ、輪郭はペン?に水彩絵の具で色づけ? 裏にメモ無し、表にメモ (右上、3.. Wider work? Split bamboo cocoa nut jar., 左にサイズ指示 2 1/2 high, 下にメモ to be as small as possible.)。circa 1883。	スケッチ。椰子の実の水筒、沖縄の民俗事例では酒を入れる容器として使用。イニシャルのサイン。このイラストがギルマールの本に紹介されている。



写真 13 Add. 7957/10/75b [Tomb of a Liukiuan, Okinawa]. The photograph is labelled 'Lewchew tomb'



写真 14 Add. 7957/10/76 Lotus pond at T'skina.

Cambridge University Library, Department of Manuscripts and University Archives, F.H.H.

Guillemard: Photographs, MS Add.7957

※写真の転載を禁止



写真 15 Add. 7957/10/77 Gate at Entrance to Shiuri.



写真 16 Add. 7957/10/78 Entrance to Shiuri

Cambridge University Library, Department of Manuscripts and University Archives, F.H.H.
Guillemard: Photographs, MS Add.7957
※写真の転載を禁止



写真 17 Add. 7957/10/79 Inner fortification of the Citadel Shiuri, Liukiu Islands



写真 18 Add. 7957/10/80 [Liukiu Islands] A view looking down on a settlement.

Cambridge University Library, Department of Manuscripts and University
Archives, F.H.H. Guillemard: Photographs, MS Add.7957

※写真の転載を禁止



写真 19 Add. 7957/10/82 [Liukiuan Girl,
Napah-Kiang].



写真 20 Add. 7957/10/83 Liukiuan Girl.



写真 21 Add. 7957/10/84 Liukiuan Girl

Cambridge University Library, Department of Manuscripts and University
Archives, F.H.H. Guillemard: Photographs, MS Add.7957

※写真の転載を禁止

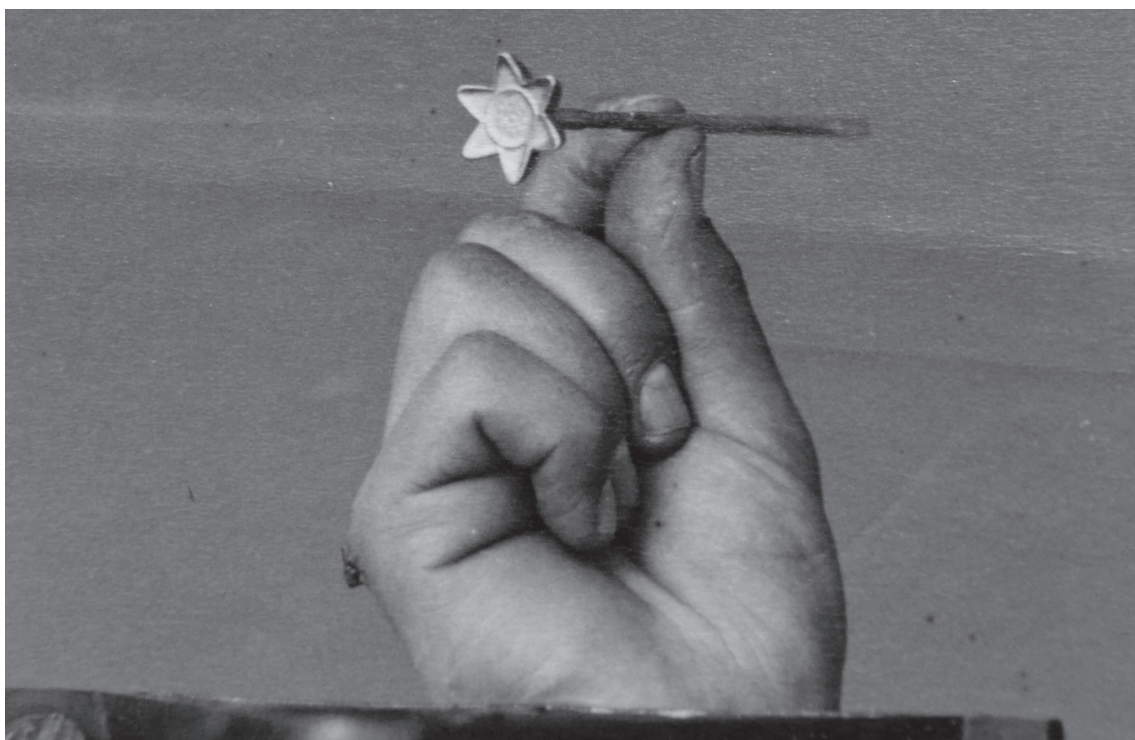


写真 22 Add. 7957/10/85 Liukiu Hairpin

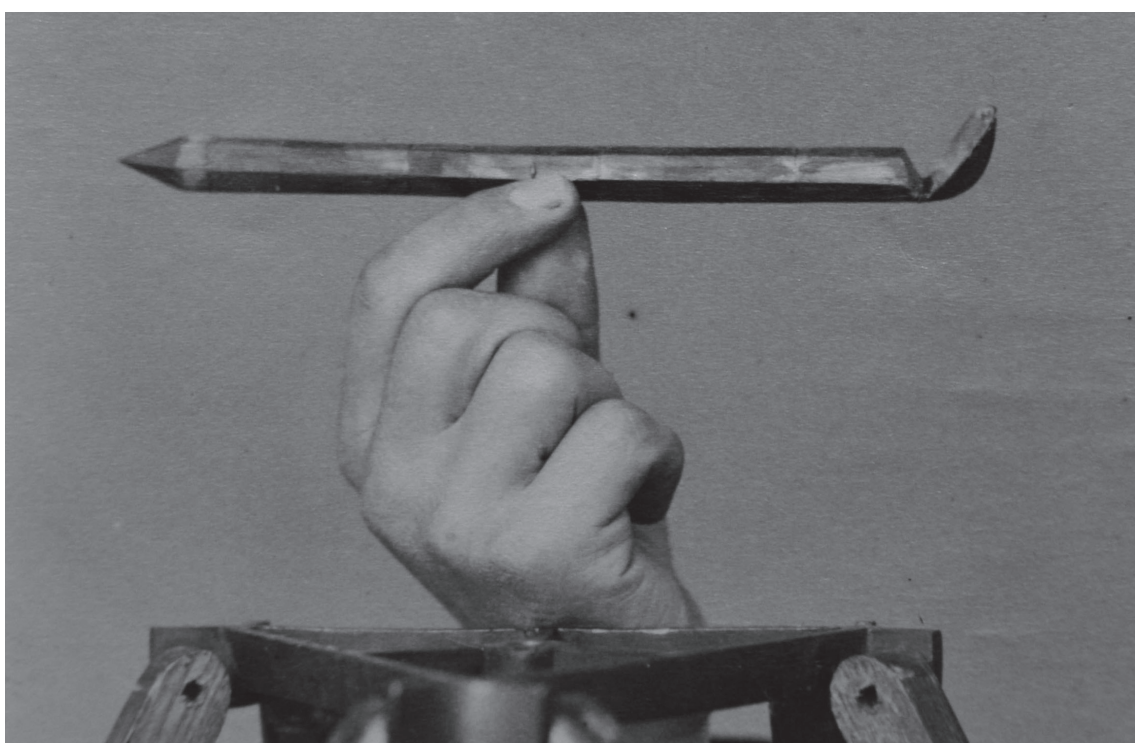


写真 23 Add. 7957/10/86 Liukiu Hairpin

Cambridge University Library, Department of Manuscripts and University
Archives, F.H.H. Guillemard: Photographs, MS Add.7957

※写真の転載を禁止



写真 24 Add. 7957/10/87b Musical instrument, Loochoo Islands.
A photograph of a samisen (a three-stringed, Japanese musical instrument) from the Liukiu Island

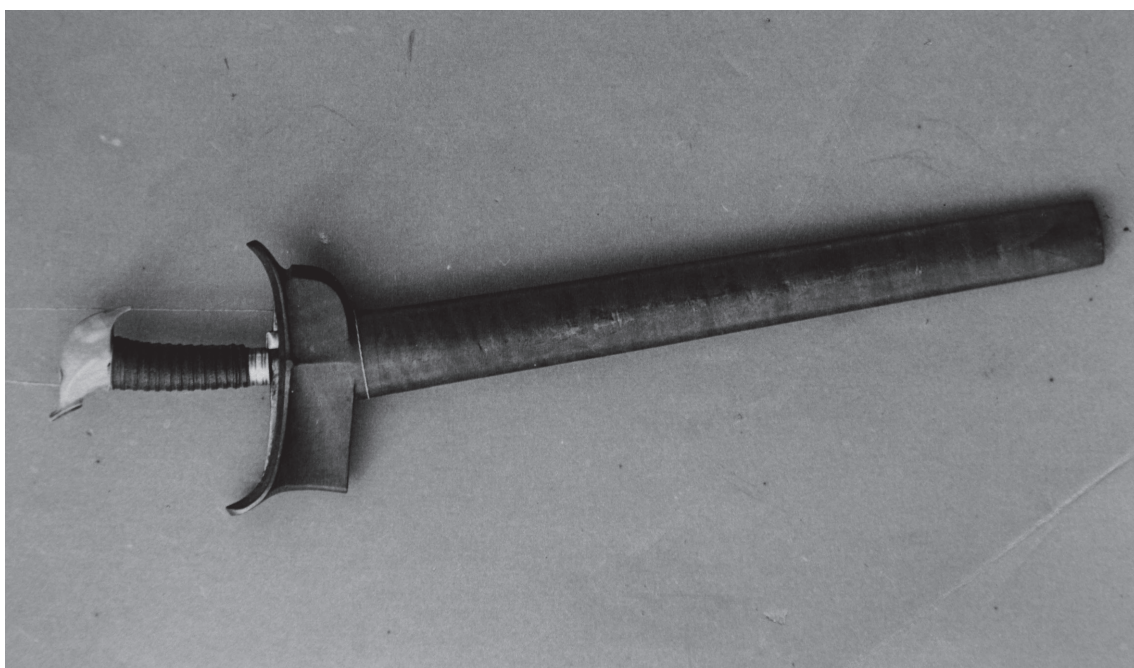


写真 25 Add. 7957/10/88 [Dagger]. Probably from the Liukiu Islands

Cambridge University Library, Department of Manuscripts and University Archives, F.H.H. Guillemard: Photographs, MS Add.7957

※写真の転載を禁止

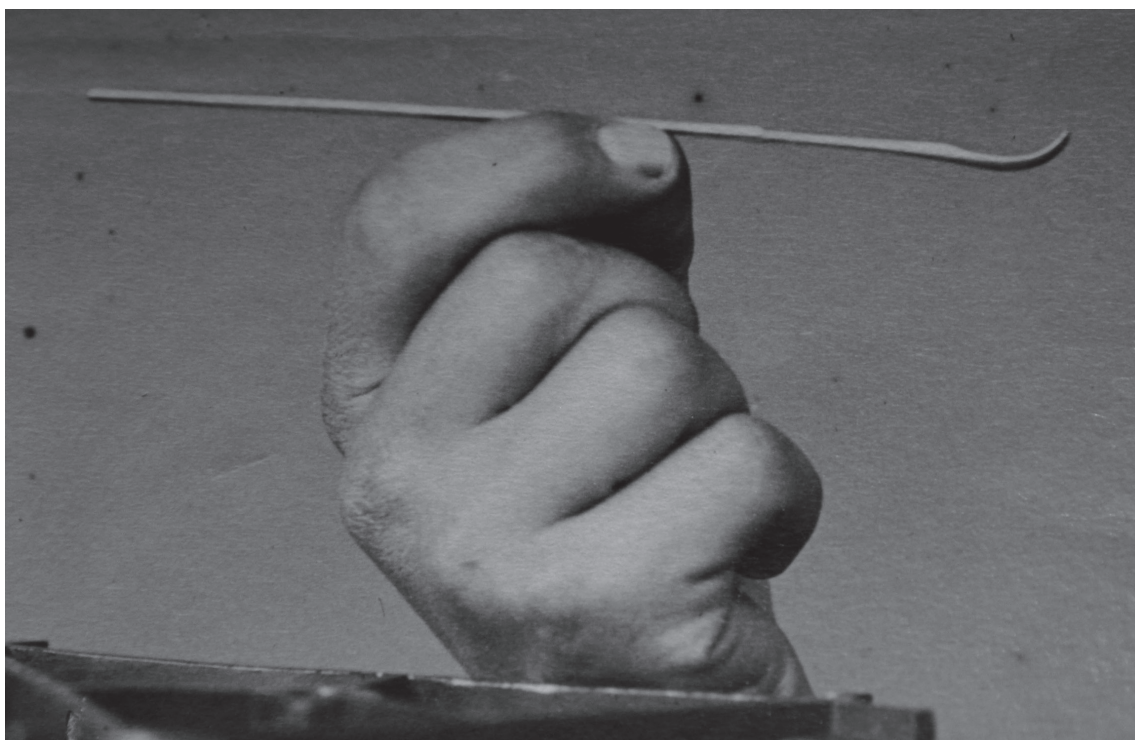


写真 26 Add. 7957/10/89 [Stick-shaped Implement]. Probably from the Liukiu Islands.



写真 27 Add. 7957/10/90 [Street and Houses] Probably in the Liukiu Islands

Cambridge University Library, Department of Manuscripts and University
Archives, F.H.H. Guillemard: Photographs, MS Add.7957

※写真の転載を禁止



写真 28 Add. 7957/10/91b [Crowd Scene]. Probably in the Liukiu Islands.



写真 29 Add. 7957/10/92 Our skipper, Formosa. A sketch by H. C. Seppings Wright

Cambridge University Library, Department of Manuscripts and University Archives, F.H.H. Guillemard: Photographs, MS Add.7957

※写真の転載を禁止



写真 30 Add. 7957/10/93 Going down Keelung River, Formosa. A sketch by H. C. Seppings Wright.



写真 31 Add. 7957/10/95 Steep Island, Formosa. A sketch by H. C. Seppings Wright.

Cambridge University Library, Department of Manuscripts and University Archives, F.H.H. Guillemard: Photographs, MS Add.7957

※写真の転載を禁止

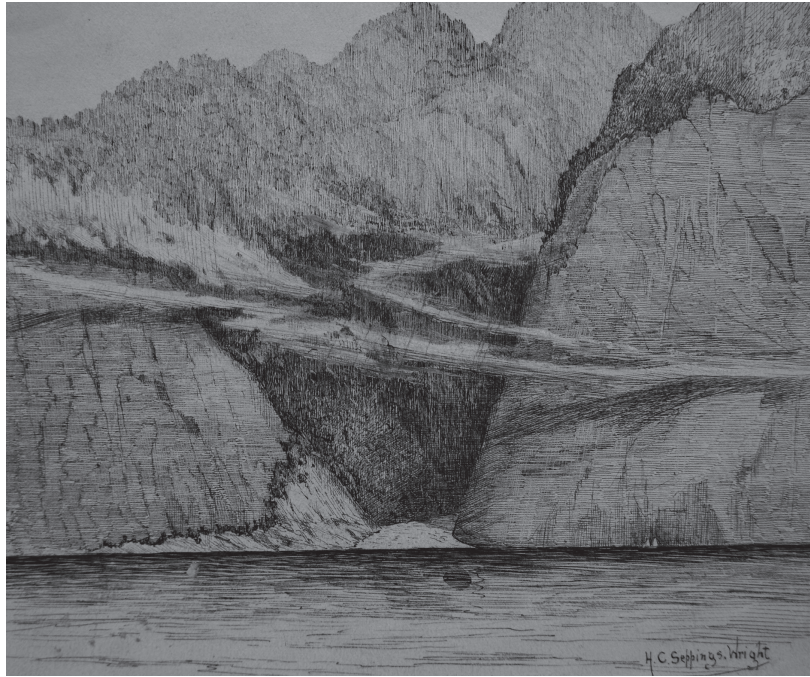


写真 32 Add. 7957/10/95 East Coast, Formosa (precipices 6000-7000 ft.) An unmounted sketch by H. C. Seppings Wright.



写真 33 Add. 7957/10/96 [Lotus Lake at T'skina]. A sketch by H. C. Seppings Wright.

Cambridge University Library, Department of Manuscripts and University Archives, F.H.H. Guillemard: Photographs, MS Add.7957

※写真の転載を禁止

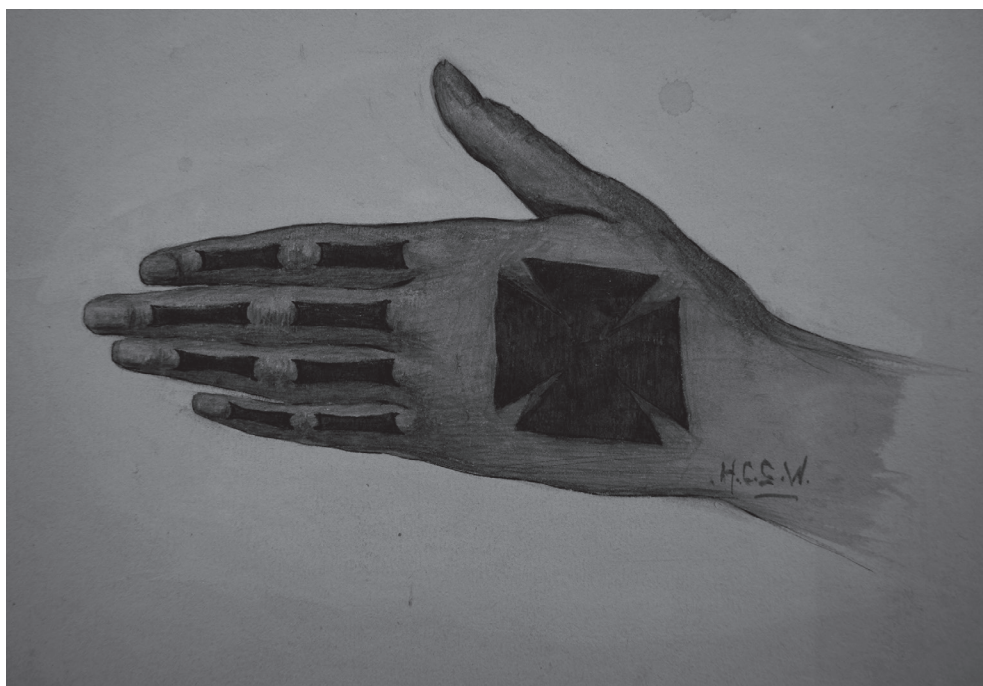


写真 34 Add. 7957/10/97 Tattooed hand, woman, Loochoo Islands. An unmounted sketch by H. C. Seppings Wright



写真 35 Add. 7957/10/98 Cocoa nut jar An unmounted sketch by H. C. Seppings Wright.

Cambridge University Library, Department of Manuscripts and University Archives, F.H.H. Guillemard: Photographs, MS Add.7957

※写真の転載を禁止

5. まとめ

ケンブリッジ大学図書館が所蔵するギルマールの琉球古写真及びイラストについて、写真は26枚16種類、イラストは7枚7種類（うち、台湾が3～4枚）を確認した。内容は亀甲墓、首里城、識名園、街、琉球の女性、琉球製の簪（男性用・女性用）や三線、インドネシアの蛇行剣（クリス）がある。それらを大別すると風景・人物・道具類に分けることができる。1882年に乾板によって撮影されたこれらの写真は、琉球処分直後の琉球の姿を見ることができる大変貴重な歴史資料である。

ギルマールが撮影した琉球の写真は「EAST INDIES X Dr. Guillemard」に保管されている他の東南アジアの写真と比べて、風景などが少し異質な感じがある。実は、今回の調査の大きな目的は那覇港や琉球船の写真を探すことであった。ギルマールがアジア各地の探検によって撮影・収集した写真には船や港の景観も含まれているからだ。期待は大きかったが、それを見出すことはできなかった。琉球では船や港の景観は撮影されなかったのかもしれない。何故か。ギルマールの琉球探検記を読んでも納得できる部分があった。ギルマール一行は那覇港に入港した後、念願かなった首里城から識名園の訪問、そして那覇を出港するまで常に役人たちの監視下に置かれていた感がある。その理由として、そもそも彼らが初めに役人たちと交渉した時は、沖縄本島の北に位置する運天港に移動するよう言われている。琉球処分直後の琉球のことである、歓迎されざる客であったのかもしれない。しかし、ギルマールは長岡護美の紹介状という強力な武器を持っていた。結果、彼の願いは聞き入れられ、首里城や識名園を訪問することができた。しかし、常に監視の目が光っていたとしても不思議ではない。そのため、彼が撮影するものにも一定の規制があったのかもしれない。風景写真は観光的な美しい場面ばかりである。人物はきちんと琉装をして姿勢を整えた女性モデルを撮影している。道具類は三線や貴重であったと思われる蛇行剣（クリス）などである。生々しい現実や風俗を写したというよりは、どこか整えられて飾られた写真の感がある。これが、東南アジアを写した他の写真とはどこか異質な感じがした理由かもしれない。

謝辞

コレクションの調査と本紀要における公開については、ケンブリッジ大学図書館の特別の許可を得た。記して感謝するしだいである。

註

- 1) 写真とともに所蔵されているイラストに、サインが書かれている。
- 2) 船の詳細については、*Mercantile Navy List* 1877, 1879, 1882, 1883による。以下のURLにより、電子にて閲覧可能。船の大きさについては、*Mercantile Navy List* では、260 Gross ton. 177 Net ton. とあるが、ギルマールの著作に420トンとあるので、ここでは後者を採用した。
(<http://www.crewlist.org.uk/data/vesselsnum.php> 2015年12月18日アクセス)
- 3) 著作の原語は英文で、和訳はすべて中西による。
- 4) ケンブリッジ大学に留学。明治期の外交官。東南アジアで探検中のギルマール一行と出会い、琉球探検の意思を聞く。当時の沖縄県令上杉茂憲と親類関係があったことから、紹介状を書いてギルマールに渡した。
- 5) 沖縄県令上杉茂憲は、この時上京していた。
- 6) 原文では3フィートとある。1フィートは30.48センチメートル。
- 7) *Avicula macropteron*：シノニム。現在の学名は *Preria penguin*、和名ではマベガイ。真珠貝の仲間で琉球列島にも分布する。

引用・参考文献

- 小山騰（編）2005 『ケンブリッジ大学秘蔵明治古写真－マーカーザ号の日本旅行－』 平凡社
- Guillemard, F. H. H., 1886, *The Cruise of the Marchesa to Kamschatka and New Guinea, with Notices of Formosa, Liu-Kiu, and Various Islands of the Malay Archipelago*. London; John Murray.
- 沖縄県教育庁文化課（編）1985 『金石文－歴史資料調査報告書V－』 沖縄県文化財調査報告書第69集 沖縄県教育委員会
- 山本正昭（編）2002 『円覚寺跡－遺構確認調査報告書－』 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第10集 沖縄県立埋蔵文化財センター